

小学五年

国

語

解答と解説

1

問一	エ	21
問二	イ	22

問三			
ら	す	し	早
。	こ	、	弓
	と	病	が
	の	気	不
	方	を	安
が	説	に	
大	明	な	
事	す	っ	
だ	る	て	
と	よ	い	
判	り	る	
断	も	こ	
し	は	と	
た	げ	を	
か	ま	察	

23
24
25
26

2

問四	鮮	
	や	
	か	
	で	
問五	価	39
	ア	40

問一	ウ	36
問二	無	
	意	
	識	
	の	
問三	中	37
	ウ	38

問九	ア	33
問十	天	
	井	
	の	
	模	
問十一	様	34
	ウ	35

問四	④	
	ウ	27
	⑩	
	ア	28
問五	ア	29
問六	エ	30
問七	ウ	31
問八	イ	32

(配点)

1 問三	8点、問四 各2点、他各5点	}	計150点
2 問六	各2点、他各5点		
3 4 5	各2点		

【解説】

① まはら三桃『かがやき子ども病院トレジャーハンター』（講談社）から出題しました。

早弓は病気のためさまざまなことが制限され、体の面でも気持ちの面でも常に苦しさやつらさを抱えているため、時折それをゆがんだ形で友達や母親にぶつけてしまうこともあります。病院に入院している子どもたちと、そんな子どもたちを見守る大人たちの心情をその表情や行動から丁寧に読み取りましょう。

問一

B1 具体化 比較

——線①の直前にある、早弓には「天井の模様が、壊れた白血球にしか見えなくなった」ことから考えます。上を向けば（早弓はベッドで過ごすことも多いのでその機会はずつと多いはずです）、常に自分の病気のことを意識せざるを得ないという環境だとわかります。ア「どんな働きをする細胞なのか」、イ「想像力：ひたむきな少女」、ウ「さまざまな病気」の部分がこの一文からは読み取れません。

問二

B1 理由 比較

——線②の直後に「考えただけでもぞつとした」とあるように、早弓が病気の説明をうけ、怖がっていることがわかる描写がありますので、答えはイです。ア・ウには怖い、不安というような言葉が入っていません。また、エは「どういうつもりで：怖がらせるのかわからず」の部分が不適切です。

問三

B2 理由 推論

——線③の「早弓の表情の変化」とは——線②の「眉を寄せ

た」を指します。つまり、先生は早弓が怖がっていることに気づいたのです。「そこで言葉を切った」とは、病気の説明を途中でやめたということです。その後で「力強い声で」「頑張りうね」と言っていることから、「治療に対するやる気」が出るように早弓を上げますことを優先させたのだと考えられます。ポイントとは三つです。①早弓が怖がっている（不安になっている）ことに気づいたこと、②説明をやめて、上げますことにしたことが記述できているか、③理由を問われているので、文末が「～から。」の形になっているか、です。

※設問の指示や字数・文字指定に従っていないものは不正解とします。ただし、誤字脱字が一つの場合は減点1点、二つある場合は減点2点、それ以上は不正解とします。また解答の説明に過不足がある場合は減点3点とします。

問四

B1 関係づけ 比較

④ の直後に「そのときは風邪かな、と思った」とあるので、ここには「ぞくぞく」が入ります。

⑩ 前日の晩に、家族が面会に来られないことを聞かされ、そのつらさ、いらだちから日彩にちよつとした意地悪をしています。おそらく、つらい気持ち、さびしい気持ち、うしろめたい気持ちなど、さまざまな気持ちがいろいろまじっているだろうことが考えられます。好きなパンケーキも美味しく感じられないはずですから、ここには「もそもそ」が入ります。

問五

B1 理由 比較

——線⑤の状態は、——線⑦の直前で「不機嫌に黙りこんでしまった」とも表現されています。——線⑤の直後には、「家

族がそろってお見舞いに来てくれるはずだった。それが急きょ取りやめになってしまった」とあり、さらに読み進めると、弟が感染症になったため、ウィルスを運ばないためにも家族全員が来られなくなった、とその状況がくわしく書かれています。早弓がそんな目にあっている中、同室の日彩と里央は家族のもとで外泊できるとはしゃいでいます。これが早弓が「無言でうつむいた」「不機嫌に黙りこん」だ理由でしょう。ですから答えはアです。早弓は、日彩たちにいらだっていますから、イ「気を遣わせてしまうと思った」、エ「どう説明していいかわからなかった」という言葉はあいません。ウ「二人の会話が耳に入らなかった」の部分が本文の内容とあいません。

問六

B1 具体化 比較

——線⑥の直後に「電話の向こうのお母さんの声は消え入りそうで、早弓も返事を返せなかった」とあることに注目します。家族が来られないことに対して、早弓がお母さんに不満をぶつけられなかったのは、お母さんも苦しんでいることに気づいているからでしょう。お母さんは、一人入院生活を送っている早弓に、楽しみにしていた家族との面会がなくなると伝えるのがつらいのだと考えられますから、答えはエです。「声は消え入りそう」とあるので、はげますニュアンスがあるアは不適切です。お母さんが一番に気を遣っていて、かわいそうに思っているのは早弓に対してだと考えられますから、自分たちの事情を「理解してほしい」というイや、早弓よりも弟のことを心配しているようなウは不適切です。

問七

B1 理由 比較

——線⑦の直前に「不機嫌に黙りこんでしまった早弓に、まづい空気を感じたのか」とあります。また、『「しまった」というように片目をつぶった」ともあることから、ここでの日彩は、イ「深く反省」しているというような気持ちではなく、まづい、やってしまったという気持ちだとわかります。アは早弓が不機嫌になった理由が違うので不適切です。エ「悪気があったわけではない」と早弓にわかってほしかった」というのはここからは読み取りにくいですし、「早弓を不機嫌にさせてしまった」と、——線⑦の直前の内容だけでなく、やってしまった、という気持ちもおさえられているウの方がより適当だと言えます。

問八

B1 具体化 比較

——線⑧は、早弓の時計を日彩が見ることができないようにした、ということでした。時計を見られるのは前から「ちよつ」といやな気分」だったし、日彩が時計を持つてくるような家族に頼まないのにも「ちよつと引つかかっていた」、ということも理由の一つです。ですが、本文中の【ウ】の直後に「日彩の困った顔を確かめたい」とあるように、時計を見えなくしたのは、早弓の前で家族に会えるとはしゃいでいた日彩に対するちよつとした嫌がらせをしたいという気持ちが大きいと考えられます。このことが示されているのはイです。ア・エは、早弓の意地悪な気持ちに言及されていません。ウ「日彩のひきょうさが許せず」という部分が本文からは読み取れません。

問九

B1 抽象化 比較

自分の時計を日彩に見せない、早弓自身も日彩に背を向けて

いるということから、日彩に対する拒否・拒絶の気持ちが読み取れます。

問十

B1 関係つけ

⑪の直前に「壊れた白血球」とあり、⑪を含む文に「昼寝をしようとベッドに戻り：眺めていた」とあります。ベッドから眺められるもので、壊れた白血球を連想するものは何かと考えるとよいでしょう。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問十一

B1 関係つけ

脱文挿入の問題です。「時計が見えなくなっているのに気がついた」のは日彩であるはずです。【ア】【イ】【エ】の直前の文の主語は早弓ですから、これらの場所にはあてはまりません。

2

榎本博明『なぜイヤな記憶は消えないのか』（株式会社KADOKAWA）から出題しました。

前半は、無意図的記憶とはどういうものか、後半は潜在記憶による行動の自動化について書かれ、人間の無意識の中にある記憶の力について説明されています。耳なじみのない言葉が並びますが、それぞれ具体例が多く挙げられていますので、そこからこれらの言葉はどういう意味なのかをつかんでいきましょう。

問一

B1 具体化 比較

筆者の体験を四段落で「そのようにして」で受け「とても懐かしい気持ち」が読み上げられるとともに、何十年もの間ほとんど

ど思い出すことのなかった記憶が、つぎつぎに蘇ってきた」とまとめています。このことと同じ内容なのはウです。ア「目に見えないことに関する記憶の方が残りやすい」、エ「今まで自分が体験したことのないはずのことまで、記憶として蘇る」とは本文に書かれていません。イ「懐かしい気持ちになれる」ということが一番言いたいことではありません。筆者は「無意識の中に閉じこめられている記憶がある」ことを説明したいのです。

問二

B1 置換

「自分の中に眠っていた記憶」とは、長い間「思い出すことのなかった記憶」のことです。これと同意の表現を決められた字数で探します。すると——線②の直前の段落に、「無意識の中に閉じこめられている記憶」を見つけることができます。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問三

B1 具体化 比較

線③に「記憶の発掘」とあるように、この「記憶」は普段隠れている、「自分の中に眠っていた記憶」「無意識の中に閉じこめられている記憶」です。これと同意になるのはウです。

問四

B1 具体化

線④の次の段落で、『失われた時を求めて』の内容に触れ、その次の段落でプールの意見が書かれています。そこには、「プールのストは、…無意図的記憶…こそが、鮮やかで価値のあるものだ」とあります。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問五

B1 理由 比較

——線⑤の直後に「あの頃はずっと背が低かった：当時と同じ感覚を得るはずがないと気づいた」とあります。その後、「腰をかがめて低い位置に指をあて」当時と同じ感覚を得ることで「突如として」さまざまなことを思い出ししています。「当時と同じ感覚を得る」ことが記憶を呼び覚ますきっかけになるが、——線⑤の行動では「当時と同じ感覚」を得られなかったため、何も思い出せなかったのだとわかります。このことについて書かれているのはアです。イ「意図的に思い出そうとすれば歪んだ形で思い出される」、ウ「純真な気持ち」、エ「視覚情報は一切入れずに」などの言葉が本文には書かれておらず不適切です。

問六

B1 関係づけ 比較

接続語の問題ですから、前後の関係を読み取ります。⑥の前の文では「当時と同じ感覚を得るはずがないと気づいた」とあり、後では当時と同じ感覚が得られるように「腰をかがめて低い位置に指をあて」ています。ですから、ここには順接の「そこで」が入ります。それを⑦で受け、「突如として：蘇ってきた」と続くので、ここには前に述べた出来事が起きた後にその結果としてある出来事がすぐに起きたことを示す「すると」が入ります。⑨の前の段落には「潜在記憶が、私たちの日々の行動を無意識のうちに導いている」とあり、⑨の段落で通学や通勤を例にだして説明しているので、ここには「たと

えば」が入ります。⑪の前の段落では、「いつも通りに行動すればよいときは、潜在記憶に任せていれば問題ない」とあるのに対して、⑪の段落では、いつもとは違う行動をとらなければならぬときの話をしています。ですから、ここには「だが」が入ります。

問七

B1 関係づけ 比較

「⑧」という音楽を聞くことができた」を「すべてを再び見出したのだ」と言い換え、その後でその時見出したものとして「わたしの短マント、ランドセルの皮：姉さんとママの服地のおい」をあげています。すなわち、「彼の無意識の中に閉じこめられていた」思い出が列挙されています。ですから、⑧には「思い出」があてはまります。この「思い出」とは無意識の中に眠っている記憶のことです。「見出した」ものは、「無意識」というより、当時の「思い出」とする方が、彼が「見出した」「短マント：祖父の声の響き：服地のにおい」といった言葉にフィットします。

問八

B1 具体化 比較

「日常的に繰り返される行動」については、⑨を含む段落、そして、——線⑩を含む段落の冒頭で具体的に書かれています。そこでは、日常的に繰り返している行動については、「いちいち意識しなくても、潜在記憶が導いてくれる」、つまり、日常の行動は無意識のうちに問題なく遂行できることが書かれています。これが「自動化されている」ということです。ですから、答えはイです。アは行動ではなく記憶の話になってしまし、エは失敗の話になっています。ウここでは「日常的に繰

り返される行動」の話をしているので、「非日常の行動をとるときであつても」という前提がそもそもおかしいです。

問九

B1 抽象化 比較

コーエンの分類について例をあげながら説明している部分を参考に考えましょう。——線⑫は、いつもと違う行動をとらねばならなかったのに、いつも通りの行動をとってしまった、という「目標の切り替え」です。——線⑬は、すべきことを忘れてしまった、ということなので「脱落」です。

問十

B1 関係づけ 比較

⑭を含む一文に、「このような失敗から気づくのは」とあるので、これは、⑪以降からの話のまとめだとわかります。——線⑬の次の段落に、「そんなとき（このような失敗をしたとき）、日頃の行動を導く記憶が：無意識化されながらも、いかに強く自分の行動を支配しているかに改めて気づく」とあります。日常でよくある「このような失敗」は、潜在記憶によって、「いちいち意識せずに行動」することが多いからこそ起こるものです。このことの例として、コーエンの失敗の分類、筆者自身経験した失敗をあげ、⑭を含む一文でまとめる、という流れです。⑭は——線⑬の次の段落に書かれた内容と同意の表現になると考えられますから、アが正解です。

③

A2 知識 関係づけ

文脈を考えて、慣用句やことわざを完成させましょう。知らなかった言葉、自分で例文を作ることができない言葉について

は、辞書などで確認してください。

①「何度も」注意していることから、トラブルを未然に防ぐために、相手に注意や警告をするという意味の「釘をさす」があてはまります。

②「生き字引」とは、見聞が広く、何でもよく知っている博識な人のことです。「他山の石」とは、どんなつまらないものでも、心がけ次第で自分をよくすることに役立つものだ、ということ。警め言葉で使われることはまずありません。

③「息がかかる」とは、有力者や影響力のある人から支援を受けていたり、支配下にあつたりする状態を指す慣用句です。

④「手にとるように」とは、物事の内容や状況が具体的に理解できる様子を表す言葉です。

④

A2 知識 比較

述語による文の分類の問題です。アは「何がナンダ」、イは「何がドンナダ」、ウは「何がドウスル」の形の文です。述語を言いきりの形に直した時、「名詞十だ」か、「形容詞・形容動詞」か、「動詞」かを見極めましょう。

①「あります」の言いきりの形は「ある」です。「動詞」です。

②「山です」の言いきりの形は「山だ」です。「名詞十だ」です。

③「きまじめだ」は言いきりの形になっています。「きまじめな」と活用させることができるので、これは形容動詞です。

④「あたたかい」は言いきりの形です。「形容詞」です。

⑤「ことです」の言いきりの形は「ことだ」です。「名詞十だ」です。